



2006年(平成18年)

3月号(No. 730)

社団法人 日本山岳会
The Japanese Alpine Club

定価1部 150円

URL ● <http://www.jac.or.jp>e-mail ● jac-room@jac.or.jp

目次

マナスルへの道②

第一次マナスル隊失敗の原因と教訓	1
シンポジウム「日本山岳会のこれからを考える」第2回	4
中央分水嶺踏査	6
岩手/山陰/岐阜	
支部だより	8
山梨/山形	
東西南北	9
高島北海のケルン/短歌	
活動報告	10
山研委員会/東海支部、京都支部、関西支部、自然保護委員会共催/事業委員会/01会	
渡辺徳逸さん追悼の記	13
図書紹介	14
会務報告	16
ルーム日誌	17
会員異動	17
Climbing & Medicine	54
図書受入報告	18
INFORMATION	19

▶ 日本山岳会事務(含図書室)取扱時間
月・火・木 10~20時
水・金 13~20時
第2、第4土曜日 閉室
第1、第3、第5土曜日 10~18時

マナスルへの道②

第一次マナスル隊失敗の原因と教訓

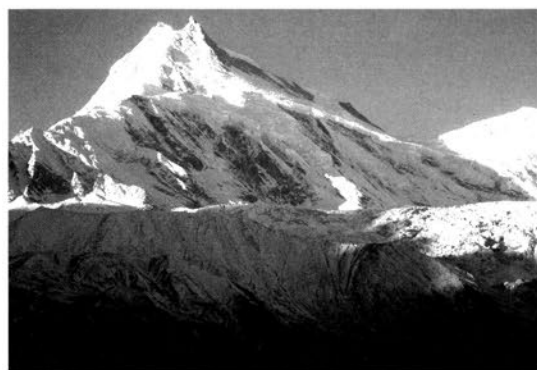
山田二郎

マナスルが、日本山岳会隊によつて初登頂され、今年で50年になります。マナスル登頂の軌跡をたどる二回目、1953年の第一次登山隊に若手隊員として参加した山田二郎氏に敗退の経緯について書いてもらいました。

1953年の第一次マナスル登山隊は前年の偵察の結果を受け、三田幸夫隊長以下、田口、高木、加藤(泰安)、辰沼、村山、加藤(喜一郎)、村木、山崎、石坂、山田の各隊員、毎日新聞から竹節、依田、学術班として川喜田、中尾といったメンバーで、戦後初のヒマラヤ8000メートル峰に向かう日本

を代表する登山隊として、3月に日本を出発、ネパールに向かった。途中約18日間のキャラバンの後、チベットに近いサマ部落郊外にベースキャンプを設けた。そして、マナスル氷河左岸にC1とC2(後にともに撤収)、およびC3、5600メートルのナイケ・コルにC4を、黒岩の上にC5(後に撤収)、

北峰から落ちるアイスフォール手前にC6、プラトーに向かつて延びる大斜面の裾、6600メートルにC7、7100メートルのノース・コルにC8を設けた。第一次のアタック隊員、加藤(喜)と私、サポート隊が、プラトー上に最終のC9を設けるべく登攀を始めたが、途中7350メートル付近で時間切れとなり、そこに雪洞を掘ってビバークした。しかし、翌日は猛吹雪でやむなく撤退。その後、全員がナイケ・コルのC4に集まって休養の後、最後のアタックを試みるべく加藤(喜)、石坂、山田が、5月31日、プラトー北端7500メートルのC9に入り、翌日、頂上を目指して出発。しかし、頂上までわずか375メートルを残し、7750メートルを最高到達点として撤退することとなった。



前年の偵察を受け、第1次隊がマナスルへ挑んだ(写真=藤田弘基)

一般的に登山隊が成功するとき、意外とたいした困難に遭うこともなく、スラスラと事が運ばれることが多いものだ。しかし、第一次マナスル隊では、経験不足からくる失敗と、その対応に悪戦苦

関の繰り返しであったように思うが、また得られた教訓も多かった。60年以上も前のことで、記憶の定かでない部分もあるが、その失敗の原因と教訓について述べてみよう。

(1) ヒマラヤのスケールに関する認識不足

失敗の最大の原因は、ヒマラヤの8000^{メートル}峰についてのスケールに関する認識不足に加えて、超高所での運動能力低下を甘く考えていたことにある。

極地法でのキャンプ数もBCから最終キャンプまで4つか5つで足りると考えたが、実際には6つでも足りず、プラトー北端からのアタックとなり、7750^{メートル}で時間切れとなってしまった。運動能力も、日本での経験(1時間で約300^{メートル}の高度差を登る)をさらに割り引いて計算したものの、実際にははるかに低いことが分かった。

(2) 酸素ボンベの問題

酸素ボンベは空輸が禁止されたためイギリスで充填したが、輸送途中で酸素が漏れてしまつて使えなかった。最終キャンプからのアタックの際、無酸素で膝までもぐ

るラッセルを強いられ、その苦しさは、今でも忘れられない。

(3) 食料計画の失敗

ヒマラヤの超高所でのどのような食料を用意すべきかもまったく未知のことで、日本から用意していたものはことごとく不評であった。

この献立は、私が学生時代に「ヒマラヤンジャーナル」に掲載されていた「ヒマラヤでの食料問題」を翻訳したもので、「消化するに当たって酸素消費量の少ないもの」であるとか「梱包も簡素なものであること」などが例示された、欧米人向けのものであった。したがって日本人の口には不向きで、最初の数日で酷評を受ける羽目になつてしまった。

唯一の救いはキャラバン用の食料だった。日本の山で普段食べ慣れたものが用意されていたので、これを高所食料に転用してなんとか切り抜けることができた。しかしこのため、帰りのキャラバン食が不足するという失敗につながってしまった。

また、ありがたかったのは加藤(泰安)さんが工夫してハイキャンプに届けてくれたヤクのメンチボ



第1次マナスル登山隊の隊員(『マナスル』から)

ールとか卵焼きで、最終キャンプで食べたメンチボール入りの「おじや」のおいしかったことは後々までの語り草となった。「さすがは満蒙遠征の古強者」と、改めて敬意を表した次第であった。

失敗から得た教訓は以上の通りであったが、それ以外の経験と教訓について述べてみよう。

第一次のアタックはプラトーマで到達できず途中の急斜面でピバークを迫られたが、私たち(加藤喜一郎と私)は、慶応山岳部の伝統であった雪洞を掘ることで対処することができた。雪洞の内部は、テントとは違って外は猛吹雪でも、

温かく安心して過ごすことができた。この経験から、数年後、ヒマールチュリで西面から挑む際、偏西風の脅威にも雪洞を掘ることを考え不安はなかった。

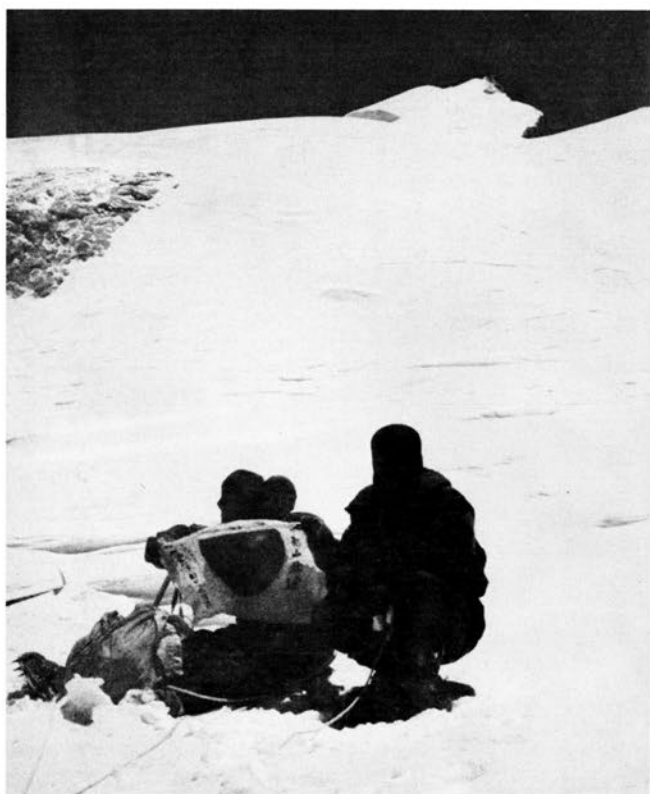
今になって第一次隊の顔ぶれを見ると、「おとなの隊」であったことが、印象深く思い起こされる。

三田さんをはじめ田口、高木、加藤(泰)、辰沼、竹節、村山などの先輩たちによって隊の首脳部が構成されており、彼らからずいぶん教えられることが多かった。

私たち若手の隊員は、元氣はあったが、日本の冬山の経験しかなく、ヒマラヤの8000^{メートル}峰、特に氷河がどんなものかまったく知らなかった。こうした若手を指導してくれた田口、高木両先輩から多くの教訓を得ることができた。

特に北峰からのアイスフォールを突破した際の、田口さん達のルート作りには舌を巻いたものであった。また、泰安さんからは遠征(探検)での貴重なノウハウを教えられた。

ただし、隊長選任については、私たち若手には理解しがたいものがあった。私たちの考えでは「登山隊とは最初に自ら隊を率いる隊



7750mの最高到達点の石坂(左)と加藤の両隊員(「マナスル」から)

長があつて、その考えに従つて隊員を選んで隊を組み立てるべきもので、それでこそ完璧なリーダーシップ、チームワークが期待できる」というものであつた。この点第一次隊は、日本を代表する最初のヒマラヤ登山隊で、隊員も全国からの選抜チームのため、隊長を最初に決めることは困難かもしれない。しかし、少なくとも第二次隊からは、原則通りにすべきではないかという考えであつた。が、どうも山岳会の様子を見てみると、

隊長が後になつて決まるらしいことがわかつてきた。若手の中でも血気盛んな加藤(喜)、村木、私などは、そうした気配を感じて「隊長雇われマダム論」などと、不穏な言動を撒き散らしていた。「三田さんに直訴しよう」と一々、3人は鶴見にある三田さんのご自宅に押しかけたことがある。ところがいざ三田さんの温顔の前に出ると、さつきまでの意気は消え、肝心の直訴もできず、ご馳走の肴とウイスキーにすっかり良い気分

になつてしまつた。「あまりはつきりと申し上げた訳ではないが、三田さんには私たちの考えを理解してもらえないに違いない」などと、いいかげんな言い訳をして帰つてきた。私たち3人の考えは、ようやく第三次隊の横さんで実現することとなつた。

実際の登山活動に入つても、第一次隊の首脳部は極地法の経験がなく、登山開始当初は物資の荷揚げにも不慣れで、上部キャンプに上がった私たちアタックメンバーは荷揚げに不安を抱いていた。B Cに問い合わせたところ「若手の反乱」という噂が広まつて、一時は険悪な雰囲気になつたこともあつたが、自然に解消された。

当時、ヒマラヤ遠征向けの装備などどこにもあるはずがなく、それぞれメーカーに頼んで特別に作つてもらふ必要があつた。テントは吉田テントに、酸素器具も篠田先生(名誉会員)のご指導で川崎航空で特注したものであつた。エアマットは藤倉ゴム、アイゼン、ピッケルは門田のヒマラヤ向け特製であつた。キャラバン用の靴は、最初、外国隊の真似をしてバスケ

ットシューズを用意したが、佐藤久一朗さんから「そんな踵のない靴でどうする」とお叱りを受けて、佐藤さん自らに特別の編上靴を作つてもらふことになつた。これがその後改良されて「キャラバンシューズ」なる軽登山靴となつたことを知る人は少ないかも知れない。

キャラバンシューズに限らず他の装備も、一次、二次、三次とその都度、隊員の意見を採り入れて改良が施され、年を追つて立派なものとなつていった。これはまさに当時の日本産業界躍進の一面を物語るものといつてよいであろう。近年、ナムチャバルワ遠征に参加して気がついたことだが、今では立派な装備が登山用具店で容易に手に入る。感心すると同時に、私たちが苦勞と同時に楽しんだ装備改良のおもしろさを、現在の隊員は味わえないのではないかとの感慨を持ったことも事実であつた。こうして、第一次隊は、戦後、初めての大規模なヒマラヤ登山隊ということもあつて、いくつかの過ちを犯すこともあつたが、その過ちを教訓として、第二次、第三次マナスル登山隊へと受け継がれていくのである。

100周年記念シンポジウム

「日本山岳会のこれからを考える」第2回

江本嘉伸

2月11日、日本青年館で、シンポジウム「日本山岳会のこれからを考える 第2回」が開かれた。

05年7月22日に開催された第1回の副題は、「1970年以降のヒマラヤ登山の果たした役割とは」であった。今回の副題は「日本山岳会と未来の登山について」である。会場には会員である皇太子殿下も参加、最前列に座り、休憩をはさんで6時間に及ぶセッションを領



6時間熱心に聴き入っていた皇太子殿下

きながら熱心に聴き入っていたのが印象的だった。

基調講演は、竹内洋岳会員(35歳)の「私のヒマラヤ登山——H・A・Mスタイル」、中村保会員(71歳)の「ヒマラヤの東——チベットのアルプス」である。

竹内の「H・A・M」は「High Altitude Marathon」の略だ。04年ブレモンズンヒマラヤで、9カ国10名のクライマーが参加して試みられた国際登山プロジェクトのことを竹内自身が命名した。ドイツ人のラルフト、いまやそのパートナーともなっているオーストリア人女性クライマーのガリンダ、それにトップをリードする爆発力から「コマツ」の愛称で呼ばれる竹内の3人が中核だ。

竹内は豊富な画像を見せながら「超高所耐久登山」とも称する、一連の連続登山、ヒマラヤの新しい登山スタイルの一端を披露した。

シシヤパンマ登攀の後、チョモランマ北西壁を目指した昨年、雪の悪さにノース・コル経由北東稜に転じたものの疲労の蓄積からか突然倒れ、ガリンダたちに助けられ無事下山した、ひやりとさせられる一幕も語られた。今年はカンチエンジュンガ、ローツェの継続登攀をめざすという。好漢、常に生還すべし！

『ヒマラヤの東』などの著書、英文報告などを通していまや世界から東部チベット山域のパイオニアと目される中村は、ニンチェンタシラ山域、カンリガルボ山域など200もの未踏の6000m級峰が手付かずのまま聳える地域について、多数の美しいスライドで紹介した。昨年暮れ、英国山岳会に招かれロンドンで講演した時と同じスライドというが、未踏の針峰群の迫力ある美しさに息をのむ。

秩父宮記念山岳賞を受賞して、国内でも名を馳せている中村だが、実は海外ではある意味で国内以上の知名人となっている。日本山岳会が毎年発行する「Japanese Alpine News (JAN)」の編集長として一気になが広まったこともあるが、なんとと言っても、誰もが入り込ん

でいかなかったエリアの踏査とその記録の英文発表が大きい。

そして、忘れてはならないのは、素晴らしい写真の数々とともに踏査地域の見事な地図を必ずつくっていることだ。これは海外で非常に高く評価されているのでは、と私は推測する。

後半は58歳の重廣恒夫会員をコーディネーターに、若手グループに属する4人、法政大学OBの松原尚之(40歳)、東農大OBの谷川太郎(38歳)、明大OBの加藤慶信(30歳)、学習院大OGの柴田由布子(22歳、会員ではないが、学生部の一員として活動している)がパネリストの席についた。

冒頭、重廣がディスカッションの趣旨について具体的に話した。彼はまず、100周年記念式典(10月15日)直前の05年9月末の会員数と、06年1月25日現在の会員数を資料で示しながら「たった4カ月の間に20代、30代、40代、そして50代までもが少なくなっている」と指摘した。60代すら漸減しており、会員数が増加しているのは70代、80代だけなのである。日本山岳会では、これまで何度

か「長期計画策定」のような対策検討チームが活動し、分析がなされてきた。が、それが大きな成果を生んでいない原因の一つとして重廣は、こうした対策検討チームに当事者である若手会員が含まれていないことがあるのではないかと指摘、この機会に若い会員の本音を直接聞かせてほしい、と要望した。

青年部担当として4年間理事を務めたことがある松原は、95年のマカルー東稜登攀、96年のK2隊副隊長など、日本山岳会の海外登山と結構深い関わりを持つが、発言は醒めたものだった。

「率直にいつて将来は悲観的。このままでいけばダメなんじゃないか、というのが正直な実感です。02年度から始まった会員数の減少もそうだし、減少だけでなく平均年齢も上がっている」

「たとえば、ここにいる竹内君がやめたい、と言いつ出してる、と昨年聞いた。会のエースの竹内君ですらやめたい、という。本人を目の前にして失礼だけど、彼は山岳会が嫌いだからなのではないんだと思います。多分、会費に見合うものがない、のだと思う」

会費の壁は多くの若者たちにとつて共通する問題では、と松原は続ける。

「年会費1万2000円に見合うものを得られないのではない。1000円ならどうか、10000円ならどうか、30000円だったらどうか、やめないのでないか、と考えてしまう」

いきなり、リアルな年会費の話になった。では会費に見合うメリットとは何か、と聞かれて谷川。

「それ以前にどうして日本山岳会を存続させたいのか、よくわから



重廣会員の司会で進行したシンポジウム

ない。何をJACに求めてそう思うのか、が。たぶん、会に愛着があるからなのだろう。連帯感とか仲間意識を残したいのであれば、面倒を見てくれるだろう、という人が新たに会員になって会員数が増えたところで、あまり意味はないのではと思う」

愛着を持っているか？ と聞かれて加藤。4人の中で最も行動している現役クライマーだ。

「松原、谷川さんに比べてJACの大きな登山隊に参加したことがないし、そういう意味では愛着はない。しかし、ナンダ・デヴィ、チョモランマ以来、マカルー、K2とたて続けに大きな登山を成功させてきた、自分にとってあこがれの組織ではある。1万2000円をなぜ払うかといえば、そういう期待があるから」

学生部の100周年記念登山で04年8月、ムスタンのチブヒマルに初登頂した柴田は、大学山岳部を終えたこれからも山登りを続けていきたい、という。

「ただ、会員平均年齢に達する40年後にもJACが存在するかどうか。それからいまの学生たちの中にはJAC自体を知らない人が多

いのではない。もったいない、と思います」

以下、発言のいくつかを。

「古き良き山岳会をイメージしてはダメなのではないか。存続させたいならば、もう多くの人たちに門戸を開いてきたのだから5000人では中途半端。5万10万人ぐらいの会員数を擁する組織にするため早く手を打つ必要があるのでは」(松原)

「25歳の時、一度だけ晩餐会に参加して感動した。会費が負担だが」

(加藤)

「顔の見える山岳会が好きだ。高い志を持った人が中核にいてほしい」(谷川)

若手会員の率直な意見を、こういう場で聞けたことはいい。だが、これだけでは足りない。もっと広く何度かこういう試みはあつていい、ということを印象づけたディスカッションだった。(敬称略)





犬狹峠でサポート隊とともに (2005年7月10日)

念してきた経緯があったからである。2003年には踏査の特別委員会を作るなど態勢は作られたが、動きは鈍かった。ようやく重い腰が上がったのは2005年5月から。スタートしてみれば、山域が自宅から1時間程度と近いことから能率が上がった。

当支部の分担は、地点コードW322からW403までの水平距離約136kmで、岩場はなく藪山である。踏査参加人員は延べ159人、歩行時間は延べ168時間。歩行時間による道の状況を区分すると、B-2が45%、B-3が26%であり、道がなくて藪こぎをした時間が全体の71%であった。藪は高さ2～3m、直径1～2cmの竹が密生したもので、当初の予想以上に苦しかった。それだけになおさら、今回踏査した分水嶺は、藪から掘り出した宝物のように思われるのである。

嬉しいことも多かった。登山がたぐさでできた。多い時は1日おきに山に入った。分水嶺上を歩くこと自体が楽しかった。分水嶺を東から西に向かって歩いていると、右手は日本海、左手は太平洋と、両方の大海原をわが手でつかんでいるかのように思えた。日本山岳会として北海道から九州まで日本列島を大縦走しているのは、実に豪壮な気分であった。また、サポート隊の出迎えは、仲間意識が強まり、組織の有り難さを味わった。とうてい無理と思っていた分水嶺が完全に踏査でき、以前行なった山陰の百山や県境の山という点が線で繋がれた。我らの身近な山々が完全に我が物になったようで何より嬉しいかぎりである。

(藤井信一郎)

岐阜支部

足かけ3年にわたる中央分水嶺踏査完了

岐阜支部は、松峠(岐阜県郡上市白鳥町石徹白)～宮峠(岐阜県高山市久々野町)を担当することになった。全距離77.6kmのこの区間は藪山が多い。無雪期に

少しでも踏査を進めるべく、2003年10月19日に10人ほどで委員会を立ち上げた。第1回の踏査を11月15日とし、「1180m峠～見当山(1352.1m)～蛭ヶ野分水嶺公園」の計画を立てた。早田支部長以下11名の参加があり、初めての踏査としては大成功であった。

翌年3月の残雪期には、「点名山中峠～烏帽子岳(1625.3m)～那留分岐～白尾分岐」、さらに「白尾山～鷲ヶ岳(1671.6m)～1180m峠」まで推し進めた。04年度総会懇親山行も分水嶺踏査を兼ねて「位山(1529.2m)～苅安峠」への縦走、7月には「位山～川上岳(1625.9m)～1227m峠」を踏査した。テント泊で引き続き行なった「1227m峠～パラソル峠」は、各自鉈を手に1時間に500m弱しか進まないほどの第1級の藪こぎであった。秋季懇親山行では、「松峠～蛭ヶ野分水嶺公園」を2班に分け、山頂で握手。11月に「パラソル峠～1223m地点」をやり遂げた。05年3月の積雪期に2回に分けて「点名山中峠飛騨共同模範牧場～点名西ヶ洞」・「西ウレ峠～点名西ヶ洞」、さらに5月に「西ウレ峠～竜ヶ峰牧場」、7月には「竜ヶ峰牧場～1223m地点」までやり遂げた。

第13回目の最後の踏査は、05年9月10日に飛騨位山モンデウススキー場に集合し、「苅安峠」～「宮峠」の山行となった。22名の参加があった。苅安峠からは旧宮村が取り付け付けた町村界の道標が幾つかあって、比較的わかりやすくGPSを確認しながら4時間ほどで最後の宮峠に下りた。やっと終わったかと思うほどの山行であった。下山後の打ち上げ会は岐阜県下呂市湯ヶ島の宿で開催した。

多くの会員・会友のおかげで足かけ3年にわたる活動を成し遂げ、10月15日の記念式典までに全行程の踏査を完了することができた。100周年記念事業の一環であったが、未知の山にも遭遇できたことは感謝に堪えない。これを機会に支部の活動をより活性化していきたいと思う。

(高木基揚)



飛騨位山モンデウススキー場の分水嶺を示す石碑の前で



中央分水嶺踏査



踏査率：89.0% (2006.3.1現在)
(山行報告未提出分を含めた実質的踏査率は91.3%です)
延べ936日、4981人参加

岩手支部

中央分水嶺 この2年

2004年2月の担当者会議で示された分担山域について関連支部と調整した結果、青森・秋田県境沿いの発荷峠から四角岳間は、秋田支部が担当することとした。八幡平から花山峠までの岩手・秋田両支部の共通部分については、秋田支部の提案を受けて分担山域を定めずに自由に踏査し、一定期間後に調整することとなった。席上、踏査にあたる各支部の基本的スタンスの表明を求められた。支部として積極的に取り組むが、踏査対象山域の多くが支部でも未踏の蘂山であることから、従来の山行形態や会員の年齢構成などを考慮して、完全踏査の確約は保留せざるを得なかった。

この担当者会議を受けて3月7日に支部役員会を開催し、踏査2カ年計画を立案した。支部の年間行事の大半にあたる山行を分水嶺踏査にあて、とくに夏の例会として恒例となっている日本アルプス山行も、分水嶺踏査に切り替えた。

踏査の緒戦は残雪の焼石岳周辺とし、少数精鋭によって4月に枳ヶ森山、5月には大薮山に挑んだが、残

雪期ゆえの長いアプローチにてこずり、やっと「点」に到達する苦戦となった。

従来の支部山行の参加者数と同じ程度の規模で踏査できたのは、八幡平から南下して国見峠、仙岩峠を経て地森の手前までの山域であった。この区間の踏査は、悪天候による撤退や残雪期限定などの条件にも制約されて足かけ2年を要したが、分水嶺踏査の企画がなければ実現しがたかったものであり、支部活動を活性化させるうえで有益であったと思っている。しかし一方で、雨の山行中に岩場での転落事故に遭遇した。幸い事なきを得たものの、多人数による蘂山山行と万一の救助体制との関連について考えさせられた。

四角岳から南下して八幡平にいたる支部単独山域や焼石岳周辺山域の難関も、会員の熱意によって「線」が延長されつつある。踏査期限が迫るなか、未踏査部分については冬季および残雪期を利用した計画を練って臨むことにしている。

(松田和弘)

山陰支部

藪から掘り出した分水嶺

2005年9月8日11時40分、分水嶺踏査が完了した。翌日の月例会で、支部長はじめ担当の委員長や集まった支部一同、大安堵した。長く重苦しい年月だった。2003年のいつ頃だったか、支部長から説明があった時、会員からは「エー、ウソー！ あんな所の踏査なんて無理。本部の現場を知らない連中が気楽に計画して、よく言うよ……」と、悲鳴があがった。それというのも支部では1989年に「山陰の百山」、1999年に「鳥取県境の山」、2000年に「美しき伯耆の滝たち」という研究誌を発行しており、その都度、今回の分水嶺である県境を踏査したいと思いながら、その困難性から断



蘂山にて (2005年4月25日)

支部

だより



全国各地の支部から、
それぞれの活動状況を、
北から南へとリポート
します。

山梨支部

妙義山

木暮理太郎翁生誕之地を訪
ねて

05年10月の木暮祭に、木暮理太郎翁生誕の地でもある群馬県太田市より強戸山岳会の方が参加されたこともあり、支部山行として妙義山に登り、碑を訪ねようという話が支部内でまとまった。

12月17日、貸切バスにて妙義山に向かう。登山は中ノ嶽神社駐車場から2班に分け、金堂山に登る班と、中間道から妙義神社へ行く班とに分かれて行動した。金堂山へのルートは岩場が続く、その昔は岩場の達人と呼ばれた先輩達も今は歳には勝てず、少々の時間を要した。妙義山山頂では天気に恵まれ、すばらしい展望であった。下山は雪のついた岩壁を慎重に下



木暮理太郎翁生誕之地に建設された碑の前で

り、登山道を駆け下りた。その後、妙義神社に行き、好天に恵まれ楽しい山行ができたことを感謝し、参拝した。

18日は、強戸山岳会の方々の案内を受け、木暮理太郎翁生誕之地に建設した碑の前で、建設時の苦労話や、翁の話をしていただいた。その後、金山城跡から秩父の山並みや、その周辺の山々の説明を受

け、有意義な時間を過ごした。

後日、ウォルター・ウェストンが妙義山に登っていたことが分かり調べてみた。記録によると、1914年に山案内人の根本清蔵と共に妙義山の岩峰を登っていた。ウェストンはそのときの感想を

「山を目で楽しむとともに身体で楽しむことの魅力を感じる登山者にとって、木に覆われた魅惑の岩塊の隙間に屹立する妙義山のすばらしい城壁と塔ほど、その魅力を満喫させてくれるものはない」と記しており、あらためて妙義山の魅力を感じ起こした。(保坂照行)

山形支部

スキー縦横無尽

山形支部恒例の「樹氷原を滑る会」は1月28・29日、蔵王アストリアホテル泊で開催、15名の参加者があった。当日のゲレンデには約3メートルの積雪があり、参加者は三々五々、足慣らしを兼ねゲレンデ狭しとスキーを楽しんだ。

夜の懇親会では、創立100周年記念事業として山形支部が12月に実施した「絵画・写真展」の話題で盛りあがった(「山」2月号に

報告。

29日、8時30分にゲレンデに集合。快晴のゲレンデからは、朝日連峰や月山の白い峰が眺望でき、絶好のスキー日和となった。リフトとケーブルを乗り継ぎ、地蔵山頂駅へと向かう。地蔵さまに安全を祈願し、記念写真を撮る。

山頂から熊野岳へとスキーツアーをする者、朝日に輝く山岳写真を撮る者、エレガントなスキーをする者、エキサイティングなスキーをする者など……、それぞれにスキーを堪能した。まさに、縦横無尽なスキーの醍醐味を満喫した2日間であった。(渡辺誠)



縦横無尽なスキーの醍醐味を満喫

N 東 西 南 北 S

高島北海のケルン

井上 佑

高島得三は長州萩に生まれ、幼少より父のたしなむ絵に勤しみ、1972(明治5)年、工部省鉱山寮に出仕する。フランス人技師コワニエにフランス語と地質学を学び、『山陽山陰地質記事』などを著わした、最初の地質研究者である。内務省地理局雇いになり、黒部の奥の廊下を調査する。冠松次郎が生まれる前の事であり、後に、冠は高島を畏敬していた。

1884(明治17)年、農商務省の役人として、イギリスの万国森林博覧会に出張、フランス、ドイツ、イタリア、オーストリアの山林調査を行なう。翌年、フランス・ナンシーの森林学校に留学、日本画で当地の美術に影響を与えた。また、グランド・ジヨラスの

会員の皆様のご意見、エッセイ、俳句、短歌、詩などを掲載するページです。どしどしご投稿ください。(紙面に限りがありますので、1点につき1000字程度をお願いします)



高島北海のケルン

氷河を歩き、日本人として最初のピッケル、アイゼンを使用、モン・ブランなどのアルプス山岳画を描く。帰国後、山林局技官として各地の山々を巡りスケッチを行なう。1900(明治33)年、官を辞し、下関市長府に住み、山口県立豊浦中学校の図画教師となったが、これに甘んじられず、翌々年、上京し画家として活動する。朝鮮、中国、アメリカに渡り、山岳を踏破し、絵を描いた。

日本山岳会創立後まもなく入会、

特別会員(会員番号39)であった。

1916(大正5)年、文展に「富士の裾野」を出品し、この作品は宮内省のお買い上げとなる。

石柱溪は下関市豊田町にある木屋川左岸の支流白根川の分れ谷で、昔は滝音がこだまし、その音から「どうどう」と呼ばれた。石英斑岩による不等辺五角形の柱状結晶の群束が特徴で、多くの瀑布を有する。

地元の医師である山崎敏一は、この溪谷を世に知らしめたく、西市町長・豊浦郡長に協力を求めて、1924(大正13)年、北海を招いた。北海は老齢にもかかわらず、溪谷を巡り、その奇景を激賞し、柱状節理から「石柱溪四十八滝」と命名した。その後、「石柱溪四十八滝」は、国の名勝と天然記念物に指定された。

後に、石柱溪の開発に功績が大きかった高島北海を顕彰しようとの声が出て、北海の末娘に相談したところ、「父は、ヨーロッパ各地の山々を歩いているので、登山者の慕うケルン塔がよい」との話であった。

そこで、北海の娘婿で美術品蒐集家であった河村幸次郎氏や、地元の寄付により、1976(昭和51)年11月、完成序幕式を行なった。ケルンは高さ290センチ、奥行180センチ、幅85センチの自然石積みである。

短歌

熊野古道を歩く

高橋文雄

みはるかす 大うなばらを 前にして すすきと和む 那智の山旅
 ひかり揺れ すすきの穂先を すべり行く 熊野の沖の 白き船かげ
 木漏れ日の 木立の影の うつろひて はぐれ胡蝶の いにしへを舞う
 蒼杉の樹の 間かくれに ひかり見ゆ 熊野の山なみ 青薔めきにけり
 岩も樹も こけむす道に ふと覚めし わがある生の いづくへぞ往く
 寂として 梢にとぼる 柿の実の 暮る、熊野の さとの秋ゆく

活動報告

日本山岳会の
各委員会、同好会の
活動報告です

山研委員会

年末年始の「さんけん」に遊ぶ

例年になく厳しい冬を、標高1500以上の「山研」で迎えた。

上高地の冬はさぞひどい寒さだろうと身構えたが、林を吹き渡る風、斜めに降る雪は、札幌より数段やさしく感じた。踏み締める足元で鳴る雪の音はバリトンのようだし、「ヒュー」と吹く風もか細いものであった。

大きな薪ストーブに豪勢な火の手が上がり、その前に集まった人達はそれぞれに自分の時間を楽しみ、ユーモアに富んだ会話が飛び交い、お腹がよじれてしまいそう。「絵ハガキ的でない上高地の景色を撮って、それから冬期休業中の帝国ホテルを見に行きませんか？」と、たった今会ったばかりの会員が誘ってくれた。

雪混じりの風にもまれる河童橋の上から墨絵のような梓川を見て、喧騒が消えた日本一の散歩道を散策するという贅沢を味わう。大きなザックを背負った人達も多く見かけた。

花びらのような雪の舞う中、炊事用の水汲みに行って戻らぬ会員を案じ、ラッセルされた治山道を400ほど先の沢まで、スコップと柄杓を持って迎えに出た。

大晦日は快晴の空の下、スノーシューを履き、山研の取水口まで善六沢を遡る。

先頭を歩いた人は、出現したカモシカと目が合ったとか。2番手以下は足跡とのお対面だけ。でも帰路は、野猿一家の雪上散歩に出合うことができ、嬉しかった。

元旦も上天気。同宿の仲間達と明神の穂高神社へ初詣。ついでに徳沢園まで遊びに行く。雪煙をあげる前穂高岳と「氷壁」の舞台と

なった東壁を、心ゆくまで眺めた。

山研の正月は、定番のおせち料理や料亭風のお雑煮が出された。

連日の行き届いた食事を楽しませてもらいながら、我が家の正月を思い、反省することしきり。

初めて会った会員たちが、まるで10年の知己のような親しみを込めて、アットホームにもてなしてくれる。これがクラブライフの良さかと「あづましい」思いを味わうことができた。

横浜から参加のSさんは、「山岳会に入って何十年にもなるが、これまで会員だと思意識したことはなかった。でも、昨年、今年と冬の山研に来て、クラブライフの楽しさ、会員同志の連帯感を感じた」と言っていたのが、私の心に同感同感と響いている。この楽しさがリピーターの多い証なのだろう。

「一人は皆のために、皆は一人のために」が実践されているのを体験することのできた、貴重で楽しい5日間だった。

こんな体験を与えてくれた山研委員会、特に全期間をお世話くださった二人の委員の方と、楽しい仲間たちに感謝します。

(北海道支部 八木沼陽子)

東海支部、京都支部、関西支部、自然保護委員会共催

第8回森の勉強会「神宮の森」

「第8回森の勉強会」は、前回に引き続き神宮の森で、05年11月19日から20日にかけて行なわれた。

前回の参加者も多かったが、今回も64名の参加者(東海支部13名、京都支部7名、関西支部14名、自然保護委員会4名、広島支部6名、他会員6名の合計50名の会員と、東海支部支部友など会員外14名)があった。

19日11時30分より受付を開始し、12時15分からのこの勉強会の特色の一つである学科の講義を、神宮会館で田中昌二郎(京都支部)会員の司会で始める。

講義は、森林インストラクターの橋村一豊氏による「東亜半月弧―照葉樹林の文化」で、東南アジアに広がる照葉樹林の地理的、歴史的、文化的な概要の理解を深めた。さらに、総合地球環境学研究所教授である中静透氏の「人間と森林のつきあい」の歴史と展望」では、豊富な映像を見せていただながら森林と人間との関係



「神宮会館」前での記念撮影 (撮影＝箕浦靖夫)

について学んだ。

近年の森林と人間のつきあいは、大規模な面積での伐採、原生林の減少と分断化、単一樹種の大面積造林、薪炭林の管理放棄などが急速に進んでいる。わが国では、拡大造林の失敗、里山の管理放棄、草食野生哺乳類の増加、外来種の影響による松枯れなど問題を残したままのつきあい方になっている。

原生林に近い森林を復元することも、昔の里山に近い森林を維持

することもできるが、経済価値がない森林資源の管理にはお金がかかるので、価値を生み出す仕組みを考える必要がある。

森林インストラクターの川合寿之氏により「神宮の照葉樹林と観察のポイント」で、翌日の観察の参考になる話を聞く。

20日7時30分、4班に分かれて、八称宜山、剣峠の神宮南部の森林を観察するため出発する。各班にインストラクターが1名ついて、おもに植物を中心に説明を受ける。高木のスダジイやカシ類、低木のアオキ、ミミズバイなどが生茂る照葉樹林に分け入る。獣道を見て枯枝と落葉の多い森歩きを楽しみ、3時頃解散した。

(関西支部 斧田一陽)

事業委員会

栗石スキー懇親会

事業委員会主催のスキー懇親会が1月7日から9日、岩手県にて開催された。各地で降雪量、最低気温ともに記録を更新する中での開催となった。今季、県内各地のスキー場は、早期のオープンに嬉しい悲鳴をあげ、またスキー人口

も微増していると聞く。だが、同じ岩手県でありながら、降雪はあるものの積雪がほとんどなく、スキーのできない地域もあるようだ。1月7日、民宿「高見荘」に集合。26名の参加者のうち、女性は8名である。

栗石町は盛岡市の西側に位置する。すぐ隣は秋田県で、北に岩手山、西に高倉山、その間には駒ヶ岳、乳頭山を有する。この高倉山の東斜面に栗石スキー場があり、1993年には世界アルペン大会を開催。知名度も高く、最近は外国からのツアー客も多いと聞く。夕食には、地元で造られた「どぶろく」も登場し、大いに盛り上がった。

8日、薄曇り時々小雪。スキー場まで約20分を要するが、送迎を受けありがたい。帰りの時間を確認して、各自思い思いのコースに散る。数名は元事業委員の高橋さんから、スキー技術の基本レッスンを受ける。

昼食後、日本で1、2位の長さを誇るゴンドラで、高倉山から5キロのメンズ・ダウンヒルコースへと向かう。乗り場には、「山頂の気温マイナス15度、雪温マイナス9

度」の案内が出ていて、さすがに冷たい。続いて、小高倉山の乗り場の「初級者の方は御遠慮してください」の注意書きを気にしながらゴンドラに乗り、レディス・ダウンヒルコースに向かう。どちらのダウンヒルコースも滑りがいいがあり、雪質も上質でとても良かった。レッスンの成果を十分に発揮し、スキーの醍醐味を満喫した一日であった。夜は、宿からの差入れが引き金となり、追加、追加で大いに盛り上がり、その飲みっぷりは昨夜どころではない。

最終日9日は晴れ。記念撮影後、




個人手配旅行から人気のトレックツアーやエクスペディションのアレンジまで。充実度が違う「旅」のプランニングをこころがけています。山旅などあらゆるジャンルを取り扱っています。お気軽にご連絡ください。

株式会社 アトラストレック
(国土交通大臣登録旅行業1167号)

東京/〒160-0008 東京都新宿区三栄町25	三栄ハウス202	TEL 03-3341-0030
大阪/〒540-0012 大阪市中央区谷町3-4-5	中央谷町ビル501号	TEL 06-6946-9111
名古屋/〒464-0807 名古屋区千種区東山通り5-113	オークラビル6F	TEL 052-788-2422

01会 台湾最高峰「玉山」に登る

01会は、日本山岳会創立100周年を記念して、台湾最高峰玉山(3952m)登山を行なった。この山行は中山協(中華民国山岳協会)の特別会員でもある平林丈彦

雪石スキー場でダウンヒルを楽しむ者、隣の網張スキー場でパウダースキーを楽しむ者、また、登山に向かう者など、それぞれに楽しんだ。そして、期待と感動を胸に、再会を祈念してスキー懇親会を終了した。(岩手支部 西村幸雄)



降雪量、最低気温ともに記録更新中の雪石で開催

会員が計画立案、元中山協秘書長の周文氏と連絡を取り合い、周到な準備が進められた。期間は05年10月30日から11月4日までの6日間、10名の参加者で実施。平山会長のメッセージと日本山岳会会旗を持参しての、格調高い登山となった。

11月1日、登頂の朝は満天の星空を仰ぎながら排雲山荘を出発。森林限界を抜け、ジグザグの登りを繰り返して、最後は岩稜を登り、玉山山頂に立った。玉山は、主峰を中心に四方に稜線を広げ、それぞれ東峰、西峰、南峰、北峰となり、アルペン的な景観であった。

快晴の山頂からは、台湾第2の高峰雪山、中央山脈の南湖大山や秀姑巒山などの山々を展望することができた。全員が登頂を果たし、会旗を中心に記念撮影を行なった。

3日夜、中山協の幹部をお招きし、晩餐会を開催した。会場は、中山協名誉理事長で当会の名譽会員でもある蔡耀榮氏が経営する台北のレストラン「欣葉」。台湾側からは、黄宗和理事長以下12名が出席、円卓には日本側と交互に着席した。開宴に先立ち、平山会長のメッセージを筆者が読みあげ、黄

平成18年度事業委員会行事予定表

季節ごとの山行を下記のように計画しました。また、本年度の晩餐会記念山行は、神奈川県の大山(1252m)を予定しています。春山からスキーまで、魅力いっぱいの山行に奮ってご参加ください。

3月31日～ 4月4日	熊野古道	伊勢路と藤原岳
5月24日～ 5月28日	若葉山行	韓国・智異山縦走
8月2日～ 8月6日	夏山登山	飯豊連峰縦走
10月7日～ 10月11日	秋山登山	十勝・夕張・芦別
12月3日	晩餐記念山行	大山(丹沢)
1月6日～ 1月8日	スキー懇親会	開催地未定



快晴の玉山山頂(3952m)

理事長にお渡しした。通訳は周文氏が、司会は平林が担当した。次いで黄理事長から歓迎の挨拶をいただき、紹興酒で乾杯。台湾の方々は日本語が堪能で、お酒とともに会話も進んだ。晩餐会終了後、表敬訪問した中山協のオフィスでティータイムを楽しんだ。

「玉山登頂」と中山協幹部の方々をお招きしての晩餐会」という目的を果たし、再会を約束して、4日午後、帰国の途についた。

(上野美裕)

渡辺徳逸さん 追悼の記



2006年1月23日没
享年105

渡辺徳逸翁を偲ぶ

斎藤惇生

会の最高齢者であった105歳の渡辺徳逸翁が、本年1月23日静かに世を去られた。小島烏水初代会長の推薦で入会、会員番号は1784番であった。

郷土の山富士山、愛鷹山を愛し情熱を注いできた翁の業績について、会の資料映像委員会が2005年11月訪問取材をし、『山』716号に報告した。

私は1998年12月12日、翁に初めてお目にかかった。石岡慎介会員が須山口登山道復活を新聞で知り、地元に関合わせ勝又一步さんを紹介された。須山口登山道を

登り、渡辺翁に会い、この古道復活に生涯をかけて努力されたことを聞き、『山』635号に豊かな自然のなかを通る登山道の素晴らしさと翁のことを「心響く人々」の題で報告した。

石岡会員と京都支部の6名が裾野市を訪ね、地元の山岳関係のみなさんと翁の話をつとめた。

翁は東京遊学中に健康を損ねて郷里須山に帰り、郷土の発展に努力された。井戸の掘削を指導し水脈を掘りあてこの地域の水不足を解決、小島烏水の自然観に深く共鳴して富士山の自然環境保護に情熱を傾けられた。1934年ごろにあった登山ケールブルの計画を断固として反対し中止させ、そして須山口登山道の復活に心血を注がれた。その熱意が地元の人たちの心を動かし、多くのボランティアの協力があがり、1997年について復活した。

翁の話ぶりは淡々として濃みなく、温容で小柄な身体から幅広く深い教養に裏打ちされた情熱が静かに溢れ出てくるように感じられた。冠松次郎との交友が深く100通余りの書信を受けておられる話を聞いていても98歳という年齢

を少しも感じさせない記憶力に驚くばかりであった。

02年から須山地区の郷土誌「須山あれこれ」の執筆依頼を受け、取り組まれた。衰える体力を励ましながら、昨年11月、ついに500ページの大作を上梓されたのだった。

1月25日、須山研修センターで葬儀が行なわれた。神式だった。翁の遺徳が讃えられ暖かく盛大だった。空は晴れわたり、富士は翁を送るにふさわしく白く気高くそびえていた。

翁の思い出

勝又一步

富士山の麓に暮らす私は、渡辺徳逸翁を「山の先生」と慕い、お手本としてきました。その翁を思うとき、ふと頭をよぎる場面があります。

それは、古道須山口登山道の復興を機に、久しく離れていた日本山岳会との交流が始まり、復活会員となったある日、事務局から入会の心得と会の徽章が送られてきた時のことです。

翁は会の徽章を手に「これがずっと長い間欲しくてしょうがな

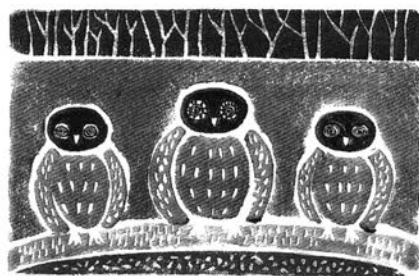
った」「このバッジを若いころ美幌峠で強風のため失くしてね、半日探したが見つからなかった」「これはね、日本画家の武井真澄さんが起草したもので、国府犀東先生とよくこの地を訪れて、私の家（珠山荘）にも時々おいでくださったんですよ。私と2人で富士山の周りを一周、スケッチしながら巡ったこともある。その時の富士山のスケッチの下絵を頂いてここにあら」と、子どものように目を輝かせて話していたことです。

どんな時も山岳会創立の心を持ち続け、自分自身を磨いていた翁は、今頃、富士を巡って交流のあったさまざまな方たちと、山や故郷を語っていることと思います。

渡辺徳逸（わたなべ・とくいつ）

1900年生まれ。富士山研究の第一人者で、富士山を巡る文人墨客との交流は広い。古道須山口登山道復興を画策、尽力を注ぎ続け、1997年、85年ぶりに復興させた。裾野市立富士山資料館名誉館長を務める。日本山岳会会員の最高齢であった。

図書紹介



幸せを呼ぶ鳥 版画・奥野漢石

『山と私の対話』達人の旅― 志水哲也・編



2005年8月
みすず書房刊
四六判 236頁
定価 2100円

『森と水の恵み』達人の旅― 高桑信一・編



2005年8月
みすず書房刊
四六判 260頁
定価 2100円

この2冊は、みすず書房から「達人の旅」シリーズとして同時に刊行されたものだ。

『山と私の対話』は、編者を含めて14名、『森と水の恵み』も同じく16名の文章を集めたアンソロジーで、そのほとんどが書き下ろしである。

前書は「ソロクライマー」としてと「アーティスト」としての2部構成になっているのが特徴。「自然」に対し、また自分に対し、真摯に「対一で向かい合う」厳しく孤独な精神の在りようは、両者に共通したもの。編者は言う。山への方向性を登山から写真にシフトしている、編者自身の心象が垣間見える。

『森と水の恵み』には、自然に抱かれて生きる幸せが綴られる。過酷な自然に対峙しながら、著者たちの文章はおおらかでほっとする。根底に流れるのは、「森と水が人々の暮らしと文化を支え」「人は自然が産み落とした申し子」であるという、編者の祈りにも似た優しい眼差しである。

アンソロジーを編む作業には、編者の心の持ちようが意外に色濃く表われるようだ。自分自身の心

の内を振り返りながら読むのもよいかも。30名の著者の紹介は紙面に限りがあり、割愛させてもらう。

(三好まき子)

『山との語り』 剣岳のふもとから― 佐伯邦夫・著



2005年5月
山と溪谷社刊
215頁×200頁
定価 1575円

143頁

本書は1994年1月から同年10月まで、「読売新聞」北陸支社版夕刊に連載されたものをベースに、少し書き足して63本のコラムとし、四季に分け「歳時記」風に並べた写真とエッセイである。主として北アルプス北部の、立山、剣岳、その周辺の山々、黒部をへだてた後立山、白馬岳周辺の山々を取り扱っている。

著者は、その山麓魚津市で生を受けた。これらの山々は、いわば「背子の山」とその続きということ

になる。現在も魚津市に住み、周辺のこうした山々を歩き続けながら、写真とエッセイを発表してきた。

当然ながら、剣岳を題材にした項目が多い。

〈剣岳は、(中略)どこから眺めても、高い緊張感でもってそびえ立っている。「すぐれた彫刻は、見る人を一巡させる。すぐれた山もまた……」と言った人がいる。したがって、カメラを構える位置を選ばせ無のがこの山。しかるに、幾つかの限られたポイント(中略)に人が雲集するのはなぜ? (中略) 本集にはそうした作を混入させる必要の無かったことを秘かによるこんでいる(あとがきより)。

こんな考え方で撮られた写真は、思わず地図を出して確認をしたくなる一枚一枚である。

一枚の写真に一文の箇切れのよいエッセイが書かれている。そのため、ある部分では解答を与えてくれたり、ある部分ではますます想像をかきたてられたりする好著である。

(茂見猛)

『夜景を楽しむ山歩き』

寺田政晴・著



2005年11月
東京新聞出版局刊
B5判 142頁
定価 1575円

まず、表紙の写真が美しい。こんな景色に出会えるなら、夜の山歩きも楽しいかもしれない。

ページを開くと、最初は「解説編」。夜景鑑賞、天体観測、夜に出会う動物など、夜の山の楽しみ方から、それにともなう危険、そのための準備などや装備が説明される。

次に「ガイド編」では、東京周辺の14座が紹介されている。たとえば「小仏城山」の項では「ヘッドランプを消して目をこらしてみたい」「クロマドボタルの発光である」など、夜の山歩きならではの醍醐味が語られる。さすが東京周辺の山のガイドを多数手がけている、著者ならではの丁寧な紹介である。

最近の山歩きは早い時間の下山を勧め、夜道を歩くなどもつての

ほかという風潮で、山小屋のトイレにしか出番がないというのでは、せっかくのヘッドランプが泣くというものだ。

「自己責任における行動、非常時の対処についての能力が備わっていることが前提条件である」という著者の言葉を肝に銘じながら、夜景の山にトライしてみたい。まずは、表紙にある「三ツ峠山から見た吉田の火祭り」と富士山」を見に。

(三好まき子)

寺田和雄・著

『山憶い 都市想い』



2005年12月
茗溪堂刊
四六判 250頁
定価 1890円

本書は、サブタイトルの「わがふるさと町田をめぐって」の示すように、東京の南西に位置して、JR横浜線と小田急線が交差する町田市が背景であり、舞台となっている。

町田は、昭和30年代に団地、二

ユータウン構想のもとに、一大ベッドタウンとして変貌した地域である。著者は、ここに生まれ育ち、市長を16年間務めた。若いころは登山に熱中し、文学をこよなく愛し、書をよく読み、文を書く文人市長である。本書は、市の広報誌等に発表してきた、市関連の文章のほか、町田と周辺を巡る文学的史跡、文学者の足跡をたどる文章、登山の回想などがまとめられている。

内容は多岐にわたっているが、小島鳥水の足跡をたどった「相模野」などの2編、水彩画家・大下

藤次郎礼賛と「武州七国峠」、詩人・八木重吉追想は、ひととき思い入れがこもっていて、味わいが深い。

この種の本は、あれもこれも収録したくなることだろうが、大森久雄氏の名編集ぶり、49編は4つの章立てで、読み進みやすく整理されている。また小泉弘氏の装幀によって、清楚な仕上がりになっている。作り手に恵まれた幸せな本である。

(松沢節夫)

日本山岳会創立百周年記念出版



増刷出来!!

日本全国四〇〇〇山の
情報を網羅!

新日本山岳誌

日本山岳会・責任編集

菊判(1992頁)上製/クロス装/カバー掛け/函入り 定価18,900円(税込)

択捉・国後など北方四島の山から、南西諸島の山々まで、日本全国の山に登った、撮った、調べた、そして書いた。日本山岳会の全国25支部約500名が総力をあげて編集執筆にあたった最新・最大の山岳百科がついに完成!

△ 推薦のこぼし △
日本山岳会二代会長高頭式氏による「日本山岳誌」から百年、山岳の現況を記述し後世に残すべく、百周年記念事業として本書ができました。
日本山岳会会長 平山 善吉

ナカニシヤ出版

〒606-8161 京都市左京区一乗寺木ノ本町15番地
Tel.075-723-0111 Fax.075-723-0095
URL http://www.nakanishiya.co.jp/

会務報告

2月理事会

日時 2月8日 18時30分～19時

50分

場所 日本山岳会会議室

「出席者」 平山会長、平林・橋本・田邊各副会長、吉永・賛田各常務理事、石田・篠崎・大蔵・野口・藤井・渡邊・石橋・古野各理事、山本監事、小倉・重廣・今村各常任評議員

「委任」 斎藤理事、一力監事

【審議事項】

1 創立100周年記念事業関連

(1) 収入状況 (18年1月末現在)

1億177万4704円 (内募

金706万46229円)

(2) 支出状況 (18年1月末現在)

6422万6421円

(3) 2月繰越金 3754万828

3円

2 「当面の運営方針」の具体策取りまとめについて

1月理事会に提案された当面の運営方針―新しい100年の第一歩として―の具体策について理事會に5つの検討グループを設

置して鋭意検討中である。2月中に取りまとめ、3月理事会に提案する見込みである。 (承認)

3 名誉会員推薦規定 (内規) について

常任評議員より規定の改定案が示された。既定の方針に従い、早急に常務理事会案を提示し、両案の調整を行なったうえ、3月評議員會に規定改定を提案する。

なお、改定にあたっては、名誉會員推薦規定創設当時の文書が残されているため、この要点を整理する。また、常任評議員側より定款では會員外の者の推薦も排除していないのではないかと意見が寄せられた。 (承認)

4 「公益法人会計基準」改定対応のプロジェクト・チームについて

18年度からの公益法人会計基準改定に対応するためのプロジェクト・チームを次のとおりとし、早急に対策を講じることとした。

●プロジェクト・チーム：平井(財務委員)、篠崎(財務協力委員)、三上(総務委員)、賛田(財務担当常務理事) (承認)

5 マナスル初登頂50周年記念行事

●担当の田邊副会長より次の日程

で実施する旨と、2月18日のパネル・トークキング等の内容と広報状況の報告があった。 (承認)

① 2月18日 「THE マナスル―過去から未来へ―」 (於・東京体育館)

② 5月7～16日 記念レセプションおよび記念トレッキング4コース (於・ネパール)

③ 9月24～26日 「日・ネ国交樹立50周年」記念ネパール展に資料展示 (於・新宿「京王プラザホテル」)

6 平成18年度予算編成會議

2月24日、午後2時より16委員會の委員長により来年度の事業計画等を聴取する予算編成會議を開催するため、理事、監事各位の出席を要請した。 (承認)

7 支部長・支部事務局担当者會議について

2月25～26日、山梨県において開催する。参加人数、會議内容等について報告があった。 (承認)

8 「平成17年度海外登山基金」助成先について

2月7日の委員會において計6隊の申請について審査した結果、助成先を次のとおり決定した旨、事務担当の古野理事より報告があ

中央アジアトレッキングとサマルカンド9日間 7/4～17/12
レーニン峰トレッキングと世界遺産サマルカンド

¥445,000

スーパーカイルス28日間 9/25～10/22
カトマンズ・チベット・ガンガール・クレシュラプ峠・イスラマバード

¥720,000

Wec 株式会社ウェック・トレック
国土交通大臣登録旅行業1662号/日本旅行業協会正会員
〒105-0003 東京都港区西新橋3-24-8 山内ビル4階
電話 03-3437-8848 E-MAIL info@everest.co.jp

り、報告どおり決定した。

① 日本山岳会東海支部 ローツェ

南壁 (冬期) ¥60万円

② 東海大学 K2南々東稜 ¥30万

円

③ 鱈鰭同人 インド ガンゴトリ

山群メルル峰 ¥30万円

④ 日本山岳会学生部 マナスル山

域バンバリ・ヒマール ¥30万円

各隊とも若干の条件が付された。特に登山終了後の報告提出を徹底

するよう要請することとした。

(承認)

【報告事項】

1 2月6日 講演会「山で起きやすいケガの応急手当と搬送法」

(野口)

参加者約70名、会員外の参加も多く、関心の高さを実感した。医療委員会として、今後もこのような講演会を継続実施していきたい。

2 渡辺兵力名誉会員のご遺族からの寄付金について

(吉永)

秩父宮記念山岳賞基金へ、ご遺族の川口佐喜様より金20万円が寄せられた。ご遺志にしたがって有効に活用したい旨の会長名札状を発送した。

3 2月11日 創立100周年記念シンポジウムについて (重廣)

皇太子殿下ご出席予定であり、準備状況についての報告があった。

4 税務調査について

(吉永)

2月22・23日、麹町税務署による税務調査が実施される。

5 平成18年度除籍予定者の件

(吉永)

1月末現在、91名の除籍予定者がいるため、知り合い等への接触を要請した。

6 環境省「西大台地区利用適正化計画検討協議会」について

(篠崎)

協議会への参加が内々に要請されている。今後、この種の協議会へは積極的に参加していきたい。

7 06年1月新入会員 2名

(山) 1月号に報告

ルーム目録 2月

1日 事業委員会

2日 100周年記念事業フォーラム委員会

6日 総務委員会

7日 図書委員会

8日 理事会

9日 100周年記念事業フォーラム委員会

10日 マナスル委員会

13日 デオクラブ

13日 総務委員会

14日 百年史委員会

15日 三木会

16日 科学委員会

17日 委員会

18日 図書管理委員会

20日 スケッチクラブ

20日 常務理事会

21日 資料映像委員会

21日 総務委員会

21日 総務委員会

21日 総務委員会

21日 総務委員会

23日 常務理事会 自然保護委員会

24日 予算編成会議 100周年記念事業フォーラム委員会

27日 ゆきわり会

28日 高尾の森実行委員会

ターネット小委員会

ルパインスキークラブ

2月来室者451名

2月来室者451名

会員異動 (2月)

物故

山村正光 (5062) 05・12・26

山村康一 (4294) 06・1・25

森佐和子 (12145) 06・2・7

藤田克己 (12040) 06・2・13

石川保 (11417) 06・2・16

熊田文雄 (7586) 06・2・23

退会

丹部節雄 (5897)

船越元 (6530) 山陰

森山重禧 (6831)

市野瀬宜大 (8472)

古川文男 (8752) 越後

佐桑明子 (10919) 関西

澤野久美子 (11513)

川口茂路 (12495) 静岡

川口士郎 (12728) 岐阜

八木一雄 (12815)

若松純太郎 (12844) 東海
寺西清志 (13791) 石川
上野正隆 (13869) 福岡
中嶋佳代 (13876) 宮崎
内田繁樹 (13883) 福岡
終身会員
梨羽時春 (6025)



マナスル登山50周年特別企画・立案:日本山岳会

●サマ村へヘリコプターで往復します。●

懐かしのサマ・ガオン探訪の旅10日間
5月7日(日)~5月16日(火) ¥520,000

その他「エベレスト街道」「マナスル三山展望」「フリータイム」等、5月9日カトマンズで開催される記念式典に合わせた企画です。お気軽にお問合せ下さい。

国土交通大臣登録旅行業第490号/日本山岳会正会員 ●ボンド保証会員
ALPINE ツア サービス 株式会社

〒105-0003 東京都港区西新橋1-12-1 西新橋1森ビル2F ☎03-3503-1911
大阪 ☎06-6444-3033 名古屋 ☎052-581-3211 福岡 ☎092-715-1557
e-mail: info@alpine-tour.com http://www.alpine-tour.com

Climbing & Medicine · 54

登山と一過性脳虚血発作

野口いづみ

ある70歳代の男性が下山後、バスを待つ間に飲食をして入浴したところ、片側の手足にしびれを感じて歩行困難となりました。山間であったため、救急車で搬送されるまでに1時間半、病院到着までに2時間ほどかかりましたが、到着した頃には症状は消失していました。検査で、「一過性脳虚血発作」の可能性があると告げられました。

一過性脳虚血発作(TIA)は脳卒中(脳梗塞)のニアミスともいえます。急に言葉が出なくなったり、ろれつが回りにくくなったり、手足がしびれて歩行困難になったりし、脳卒中の様な神経症状を起こしますが、24時間以内に消失するものです。発症は速やかで2～5分で症状が完成し、2～15分程度で回復する場合があります。山での滑落事故の中には、このような突然の発作による事故も含まれている可能性があります。

一過性脳虚血発作の原因は脳梗塞と同様で、動脈硬化をベースに、多くは頸動脈などに狭窄がある人に生じます。狭窄部に血栓ができて剥離し、微小血栓が脳の動脈につまって発作が起こりますが、血栓が容易に溶けさって血流が再開するために、症状はすぐ消失すると考えられ

ます。なお、強い狭窄のある方では血圧の低下だけで発作を起こす場合もあります。

一過性脳虚血発作は脳卒中の前触れと考えられ、発作1カ月以内に5%、5年以内に2～4割で本格的な脳卒中を起こします。一過性脳虚血発作を起こした場合は脳卒中予備軍と考えて、精査を受ける必要があります。検査でハイリスクと診断された場合は、血液を固まりにくくさせるアスピリンなどの抗血小板薬を内服します。最近では、頸動脈の狭窄が強い場合に頸動脈内膜切除術が行なわれ、予防に有効なことが示されています。

血栓ができる原因として、脱水と急激な血圧低下があります。登山前夜の深酒は脱水を招くのでリスクになります。また、登山中は十分な水分を取って脱水量を補うことが必要です。血圧低下は飲酒、入浴などで生じますが、高齢者では食事でも血圧低下する場合があります。食後は消化器系に血液が集まりますが、高齢者ではうまく自律神経が調節できないために、血圧が下がってしまうようです。

山での突然死例の中に、休憩後、登りを再開してすぐに脳梗塞で倒れたという報告があります。この人は休憩で食事をしていなかったようですが、一般的には、きつい登りのあとに休憩をとって(→急激な血圧低下)、多くの摂食をして(→食事低血圧)、すぐに歩き始めることは、高齢者ではリスクになるといえるでしょう。また、乾杯(→飲酒による脱水と血圧低下)は山頂ではなく、下山をしてからの楽しみと心得ましょう。

図書受入報告 (2006年2月)

著 者	書 名	ページ・サイズ	出版元	刊行年	寄贈/購入別
大場秀章(著)・富山俊(写真)	ヒマラヤの青いケシ: Meconopsis, The Himalayan Blue	223pp/21cm	山と溪谷社	2006	出版社寄贈
増山曉子(著)	イタリア異界物語——ドロミーティ山地 暮しと伝説	294pp/20cm	東洋書林	2006	出版社寄贈
尾形榮一(著)	(写真集)日本百名山——完登紀行	537pp/28cm	米沢精密	2004	著者寄贈
尾形榮一(著)	(写真集)天地の民——The Nepal Himalaya	301pp/26cm	米沢精密	2000	著者寄贈
尾形榮一(著)	(写真集)天空の民——The Tibet	287pp/26cm	米沢精密	1996	著者寄贈
工藤隆雄	平成富嶽百景	199pp/19cm	東京新聞出版局	2006	出版社寄贈
関西学院大学の「ガールズ」部(編)	記録 50年の踏み跡——関西学院大学ワンダーフォーゲル部史	600pp/23cm	ナカニシヤ出版	2006	編者寄贈
沖允人(編)	世界初 厳冬期チベット縦断帰国報告書(2005年12月～06年1月)	72pp/30cm	中京山岳会・足利工業大	2006	編者寄贈
杉田博(著)	名山スケッチ漫筆 (III)——『山書研究』第48号別刷	309pp/22cm	日本山書の会	2006	著者寄贈
茨城県山岳連盟(編)	思い出の山これからの岳連2005——創立50周年記念誌	431pp/23cm	茨城県山岳連盟	2006	発行者寄贈
石川県勤労者山岳連盟(編)	ヒマラヤ 7403m イストル・オ・ナール峰	165pp/26cm	石川県勤労者山岳連盟	1979	発行者寄贈
KAC90カルシオン登山隊(編)	カルシオン峰(6,674m)登山報告書——慶大山岳部創立90周年記念登山	18pp/30cm	KAC90カルシオン登山隊	2005	発行者寄贈
日本山岳会三水会(編)	三水会30周年——日本山岳会三水会創立30周年記念誌	198pp/21cm	日本山岳会三水会	2005	発行者寄贈
Peter & Leni Gillman	The Wildest Dream——The Biography of George Mallory	287pp/24cm	Mountaineers Books	2000	購入
Harka Gurung	Peaks and Pinnacles——Mountaineering in Nepal	213pp/24cm	NMA	2004	著者寄贈

INFORMATION



イラスト 宇都木慎一

◆講演会日時変更のお知らせ

科学委員会

1月号で案内の講演会「マッキンリーの気象」は、講師の大蔵喜福氏の都合で、4月20日(木)18時30分〜20時に変更となりました。おわびして訂正します。問い合わせは、宮津公一まで ☎03-15746-2344

◆神津島・天上山登山と自然観察会

自然保護委員会

現地のガイドにて神秘の島の自然観察会を行います。

日時 6月2日(金)〜4日(日)

集合 2日午後9時 竹芝桟橋

定員 20名(先着順)

宿泊 3日は旅館ふもと屋泊

(2日は船中泊)

費用 2万円(1泊2食)

申込 5月10日までに、ハガキか

メールで川越尚子宛 ☎18

011 国分寺市本多3-7-31

✉kawagoejac@mti.biglobe.ne.jp

*申込者には詳細を送ります。

◆第23回東北・北海道地区集会

秋田支部

乳頭温泉郷鶴の湯温泉で開催。

秘湯と新日本百名山の秋田駒ヶ岳

乳頭山はいかがですか。

日時 6月3日(土)〜4日(日)

日程 3日・14時鶴の湯温泉で受付、15時30分集会講話、18

時懇親会

4日・A秋田駒ヶ岳、B乳頭山、C観光(有料)

定員 80名(会場の関係上、先着順、定員で締め切ります)

参加費 1万6000円

申込 4月20日までにハガキかFAXで、支部名、参加コースを記入して申込む ☎010-0874 秋田市千秋久保田町2-23佐々木方 日本山岳会秋田支部事務局

*申込者には詳細を送ります。

◆設立5周年記念講演会

山の自然学クラブ

日時 3月18日(土)18時30分〜20時

45分(開場18時15分)

会場 東京しごとセンター・地下1階講堂 ☎03-15221

1階講堂 ☎03-15221

◆インフォメーション欄への掲載と掲載行事への申込について

会報編集委員会

■これまで、掲載行事等への申込方法にはそれぞれ、氏名、会員番号、住所、電話、FAX、メールなどの連絡先を明記……と記していましたが、今後はスペースの確保のため省略します。申込の際は、会員番号、氏名、住所、連絡先(電話、FAX、メールアドレス)などを必ず記載し、所定の方法で申し込みを行ってください。

■2月号でもお知らせしましたが、インフォメーションへの掲載文は、必要最小限の内容での掲載とさせていただきます。

■2月号でもお知らせしましたが、インフォメーションへの掲載文は、必要最小限の内容での掲載とさせていただきます。

■2月号でもお知らせしましたが、インフォメーションへの掲載文は、必要最小限の内容での掲載とさせていただきます。

■2月号でもお知らせしましたが、インフォメーションへの掲載文は、必要最小限の内容での掲載とさせていただきます。

■2月号でもお知らせしましたが、インフォメーションへの掲載文は、必要最小限の内容での掲載とさせていただきます。

1-2310

演題 自然をもっと知るために

第一部「山の不思議発見」東京学芸大学教授・小泉武栄氏

第二部「清掃登山から見えてきたもの」アルピニスト・野口健氏

参加費 資料代1000円

定員 300名(先着順)

申込 前日までにメールかFAXで高塩賢二宛 ☎0471-49312352

✉twi9083@mb.infoweb.ne.jp

◆インフォメーション欄への掲載と掲載行事への申込について

会報編集委員会

■これまで、掲載行事等への申込方法にはそれぞれ、氏名、会員番号、住所、電話、FAX、メールなどの連絡先を明記……と記していましたが、今後はスペースの確保のため省略します。申込の際は、会員番号、氏名、住所、連絡先(電話、FAX、メールアドレス)などを必ず記載し、所定の方法で申し込みを行ってください。

■2月号でもお知らせしましたが、インフォメーションへの掲載文は、必要最小限の内容での掲載とさせていただきます。

■2月号でもお知らせしましたが、インフォメーションへの掲載文は、必要最小限の内容での掲載とさせていただきます。

■2月号でもお知らせしましたが、インフォメーションへの掲載文は、必要最小限の内容での掲載とさせていただきます。

■2月号でもお知らせしましたが、インフォメーションへの掲載文は、必要最小限の内容での掲載とさせていただきます。

■2月号でもお知らせしましたが、インフォメーションへの掲載文は、必要最小限の内容での掲載とさせていただきます。

■2月号でもお知らせしましたが、インフォメーションへの掲載文は、必要最小限の内容での掲載とさせていただきます。

■2月号でもお知らせしましたが、インフォメーションへの掲載文は、必要最小限の内容での掲載とさせていただきます。

■2月号でもお知らせしましたが、インフォメーションへの掲載文は、必要最小限の内容での掲載とさせていただきます。

■2月号でもお知らせしましたが、インフォメーションへの掲載文は、必要最小限の内容での掲載とさせていただきます。

■2月号でもお知らせしましたが、インフォメーションへの掲載文は、必要最小限の内容での掲載とさせていただきます。

■2月号でもお知らせしましたが、インフォメーションへの掲載文は、必要最小限の内容での掲載とさせていただきます。

■2月号でもお知らせしましたが、インフォメーションへの掲載文は、必要最小限の内容での掲載とさせていただきます。

■2月号でもお知らせしましたが、インフォメーションへの掲載文は、必要最小限の内容での掲載とさせていただきます。

■2月号でもお知らせしましたが、インフォメーションへの掲載文は、必要最小限の内容での掲載とさせていただきます。

■2月号でもお知らせしましたが、インフォメーションへの掲載文は、必要最小限の内容での掲載とさせていただきます。

■2月号でもお知らせしましたが、インフォメーションへの掲載文は、必要最小限の内容での掲載とさせていただきます。

■2月号でもお知らせしましたが、インフォメーションへの掲載文は、必要最小限の内容での掲載とさせていただきます。

■2月号でもお知らせしましたが、インフォメーションへの掲載文は、必要最小限の内容での掲載とさせていただきます。

■2月号でもお知らせしましたが、インフォメーションへの掲載文は、必要最小限の内容での掲載とさせていただきます。

ご協力、ご理解をお願いします。

◆編集後記◆

●2月18日に、東京体育館でマナスル登頂50周年の記念イベント「THEマナスル——過去から未来へ」が開催されました。まず、1956年、マナスル登頂まで模様を追ったドキュメント映画『マナスルに立つ』が上映され、大時代的なナレーションなど、とても懐かしく、大変興味深く見ることができました。当時は大変な観客数があり、日本にマナスルブームが起こるきっかけとなった映画でした。50年前と比べても仕方ありませんが、当日の来場者数をみると、ちよつと寂しくなっていました。

(神長幹雄)

日本山岳会会報 山 730号

2006年(平成18年)3月20日発行

発行所 社団法人日本山岳会

〒102-0081

東京都千代田区四番町5-4

サンビュウハイツ四番町

TEL 東京(03)3261-4433

FAX 東京(03)3261-4441

発行者 日本山岳会会長 平山善吉

編集人 神長幹雄

Eメール:jac-kaiho@jac.or.jp

印刷 株式会社 双陽社